

いばきた

デザイン  
プロジェクト

IBA-KITA  
DESIGN  
PROJECT



茨木市

茨木市 都市整備部 北部整備推進課

〒567-8505 茨木市駅前三丁目8-13

電話：072 (620) 1609

ファックス：072 (620) 1730

メール：hokubuseibi@city.ibaraki.lg.jp



次なる  
茨木へ。

2018/4 — 2019/3

茨木市北部地域・旧見山村 編



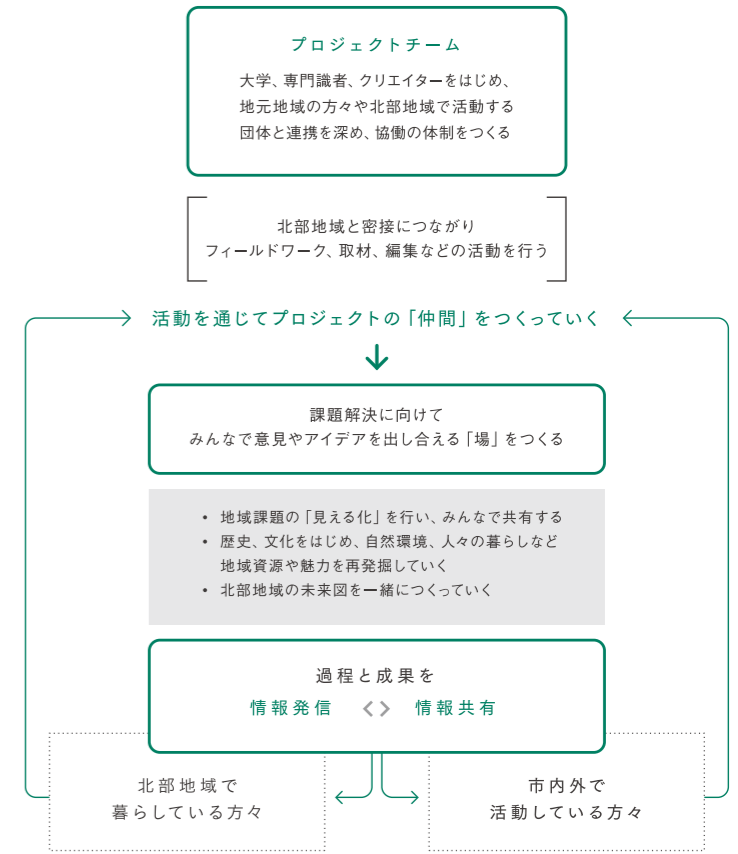
## 茨木市北部地域の 課題解決を目指して。

茨木市は、大阪市や京都市へアクセスしやすく、大学・高校をはじめとする教育機関、ショッピングモール、商店街、飲食店などの商業施設も充実していることから、関西圏の中でも「住みよいまち」「利便性の高いベッドタウン」として評価が高く、茨木市全体の人口推移は毎年増加傾向にあります。一方、北部山間地では、若者を中心とする人口流出と農林業従事者の高齢化により、産業や環境保全の停滞が続いています。特に問題となっているのが、山間地の「深刻な過疎化」です。茨木市の全面積の約半分が山間地にあたりますが、市街地の人口に対して約1%という統計もあります。

いばきたデザインプロジェクトでは、このような課題解決に向けて、地元で暮らしているの方々をはじめ、市内外のさまざまな人たちが北部地域に関心を持ち、みんなで考え、一緒に取り組んでいくことができる「仕組み」をデザインしていきます。



課題解決に向けた「仕組み」をデザインする。



茨木市北部地域は、地元の人たちから親しみを込めて「山三」と呼ばれています。

1889年(明治22年)に施行された町村制により、島下郡の大岩村・安元村・生保村・大門寺村・桑原村を「石河村」。下音羽村・上音羽村・銭原村・長谷村・清阪(現在は清阪)村・車作村・忍頂寺村を「見山村」。泉原村・千堤寺村・高山村・佐保村を「清溪村」として発足し、旧村域は大字となった。1896年(明治29年)には所属郡が三島郡となり、その後、1955年(昭和30年)に茨木市へ編入。同時に三島郡 石河村・見山村・清溪村は廃止されました(その際に清溪村の大字高山が豊能郡東能勢村=現豊能町に編入)。地元の方たちは、現在もこの旧石河村・旧見山村・旧清溪村の3つの旧村域で区分をし、親しみを込めて「山三」と総称しています。いばきたデザインプロジェクトでは、2018~2020年度の3年間をかけて1年間で1旧村域を対象に、「山三」をフィールドにした、さまざまな取組みを推進させていきます。

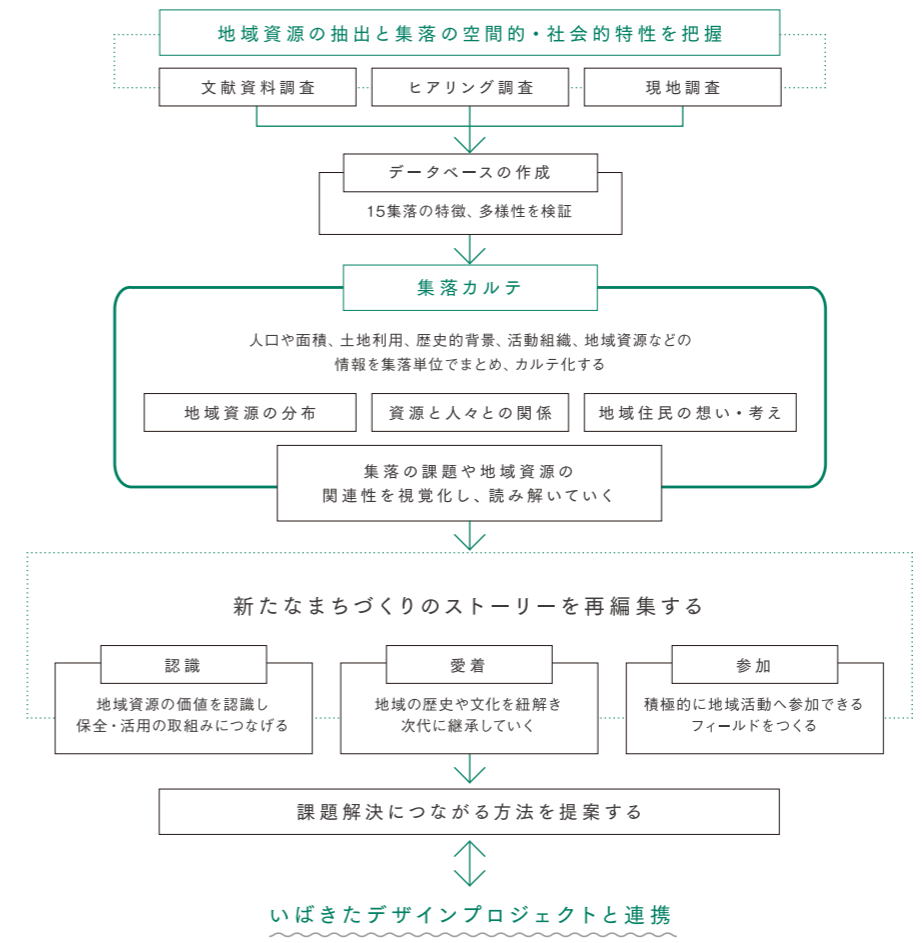
いばきたデザインプロジェクトは、2018~2020年度の3年間を実践期間としており、期末ごとに冊子を発行します。本冊子は2018年度版にあたり、旧見山村地域を対象とした活動の過程や成果を活動順に編集したものです。



## 大阪大学大学院 工学研究科の学生と、 一緒になって取り組むプロジェクト。

いばきたデザインプロジェクトでは、大阪大学大学院工学研究科 環境・エネルギー工学専攻都市環境デザイン学領域の学生が取り組む「つむぎあげる集落のストーリー」と連携を図り、地域資源や魅力の掘り起こしをはじめ、地域の空間的・社会的な特性を把握するためのデータベースづくり、地元の方々の協力によるフィールドワークなどを継続的に行っています。活動を通じて得られた情報は「集落カルテ」にアップデートし、課題解決に向けての方法を導くための情報ツールとして活用していきます。

**つむぎあげる集落のストーリー** 地域資源や魅力、歴史や文化、環境、暮らしなどの情報を「集落カルテ」にまとめ、将来のまちづくりのポイントを読み解いていきます。さらに、地元の方々の想い・考えや市内外の人たちのアイデア、行政のミッションと重ね合わせて、地域の新たなまちづくりのストーリーを再編集し、ひいては新しい価値創出へとつなげていきたいと考えています。



大阪大学大学院 工学研究科  
環境エネルギー工学専攻 助教

### 松本 邦彦さん

過去から現在に至る歴史や文化を読み解き、  
地域資源を活かした新たなまちづくりの  
ストーリーを再編集していく。

どのような地域にも、脈々と続く歴史、培われた文化があり、気候や地形などの自然環境、経済や産業などの社会環境と関係しあいながら固有のコミュニティを形成しています。しかし、これらは決して恒久的なものではなく、時代とともに変遷を繰り返していきます。地域づくりに取り組んでいく際には、単なる発展を目指すのではなく、過去から現在への連続性を見据え、衰退あるいは見過ごされてしまった地域資源の価値を読み解き、もう一度スポットを当て、それらを活かした新たなまちづくりのストーリーを再編集していくことが重要です。いばきたデザインプロジェクトでは、学生とともに地域資源の価値を読み解くためのフィールドワークをスタートさせました。地域に関する資料の収集と分析、資源データベースづくりをはじめ、地元で暮らしている方々への取材活動などを通じて、あらゆる角度から地域の可能性を探求していきます。そこから導き出される、新たな発見や方法をプロジェクトチームと共有し、北部地域の課題解決へとつなげていきたいと考えています。

松本 邦彦(まつもとくにひこ)  
1981年大阪府生まれ、茨木高校出身。大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻博士後期課程修了。博士(工学)。2009年より株式会社スペースビジョン研究所勤務を経て、2013年より現職。研究分野は、景観保全、文化的景観の保存と活用に関する研究や歴史まちづくり。





# 車作

[くるまつくり]



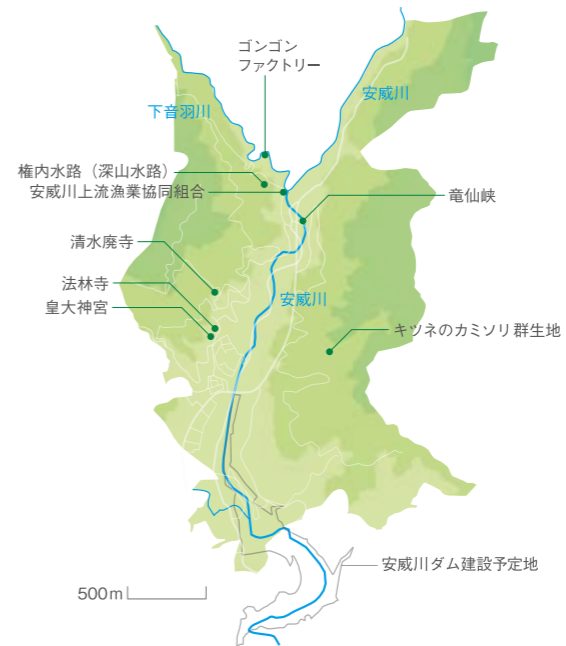
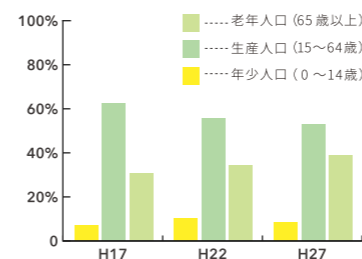
車作の地域資源は、安威川・下音羽川流域に広がる豊かな「親水空間」。

安威川と下音羽川の合流地点から南へ延びる南北に長い地形。中央部の安威川右岸に集落があり、農地の殆どが南部に集中する。安威川上流漁業協同組合では、アマゴ・ニジマスの放流や釣り場の整備などを行っている。また、北西部の下音羽川から集落に向けて、江戸時代後半に庄屋・畑中権内によって作られた「権内水路(深山水路)」がある。2022年には「安威川ダム」が完成する予定。

## 集落の基本情報

人口	227人(男:110人、女:117人)
世帯数	85戸
面積	約4.4 km <sup>2</sup>

## 年齢別人口割合の推移



安威川上流漁業協同組合  
代表理事組合長

角野 一雄さん

ダム完成によって変わりゆく車作を  
北部地域全体の拠点として機能させたい。

車作は、2022年に完成予定の安威川ダムによって大きく変化することになるでしょう。「自然環境保全」「賑わい創出」「北部地域の拠点づくり」といったダムが掲げる命題と、車作の将来に向けての地域づくりが、いかに歩調を合わせて連携していくことできるのかが、とても重要なミッションだと認識しています。竜仙峡や権内水路周辺の利活用、湖畔を望む集落の景観、安威川上流の維持管理、観光などで訪れてくる市内外の方々との交流、周辺整備事業に参画される事業者との関係づくりなど、地域と行政が一体となって、多様な取り組みを実施していかなければなりません。その上で、高齢化や人口流出をはじめとする、さまざまな課題解決への活路を導いていきたいと考えています。また、ダムができることによって、市街地から山間地への縦のアクセスが見込まれたとしても、北部地域全体の活性化につながる計画を同時に推進させていかなければ、真の目標達成とは言えないですね。ダムの北部に広がる豊かな大自然、美味しい農作物、里山の営み、歴史や文化を資産と捉え直し、スケール感のある「新しい茨木の価値」を生み出していきたい。そのための原動力となることが車作の役割ではないかと思っています。

角野 一雄 (すみの かずお)

車作生まれ。車作自治会会長などを歴任し、2011年より安威川上流漁業協同組合 代表理事組合長、2017年より大阪府内水面漁業連絡協議会 会長を務める。



# 銭原

[ぜにはら]



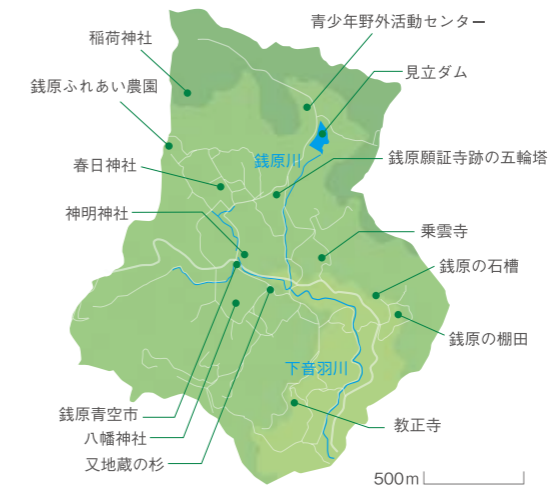
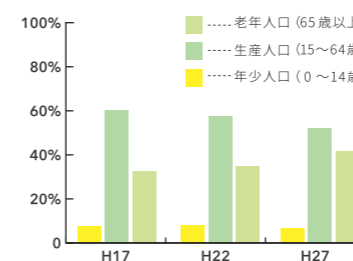
美しい棚田と多くの社寺、史跡を残す「茨木市最北端の地」。

安威川の支流・下音羽川の源流域であり、茨木市の最北端に位置し、集落は北西部・東部・南部の樹枝状になった谷の斜面に散在する。南西部には見事な棚田が広がり、美しい里山の風景を織り成している。史跡、社寺が数多く見られ、絶海中津隠棲の地にある石槽、銭原願証寺跡の五輪塔などの歴史的資産を有する。北辺部の山林地帯には茨木市青少年野外活動センターがある。

## 集落の基本情報

人口	156人(男:63人、女:93人)
世帯数	54戸
面積	約2.7 km <sup>2</sup>

## 年齢別人口割合の推移



銭原の里 高原野菜工房 主宰

## 才脇 芳喜さん

豊かな環境があるから、  
いつまでも健康で暮らすことができる。

公務員を退職して以来、銭原の農業をはじめ、文化、歴史を後世につなげていくことを自身の命題として日々の暮らしを送っています。20年前に「健康倶楽部」を立ち上げたのも、その一環です。この地域は、自然に恵まれ、空気が澄み、水がきれい。加えて、昼夜の寒暖差によって、おいしい野菜が収穫できます。その素晴らしさを多くの人たちに伝えていこうと、都会から仲間を集め、農地を開放して、みんなで楽しく農業を行うことができる「場」を提供しています。少子高齢化による農家の担い手不足を解決するためには、兼業でも、あるいは日曜だけでも、自然と触れ合いながら収穫の喜びを体験できる機会を増やし、しっかりと継続していくことが大切です。さらに、地元住民と都会の人たち、行政が一体となった新しい仕組みづくりが重要ですね。そのような地道な努力を重ねていくことで、時間はかかるかもしれませんが、少しずつ地域が元気を取り戻していくと思います。私のモットーは「生涯現役」。美しい自然に抱かれて農作業を続けることで、いつまでも健康に過ごすことができる。先祖が残してくれた豊かな環境こそが、銭原の地域資源であると考えています。

## 才脇 芳喜(さいわき よしき)

2002年、農地の有効活用と異業種交流を目的に「健康倶楽部」を発足。「銭原の里 高原野菜工房」として、都会の人たちとともに野菜づくりを続ける。



# 上音羽

[かみおとわ]



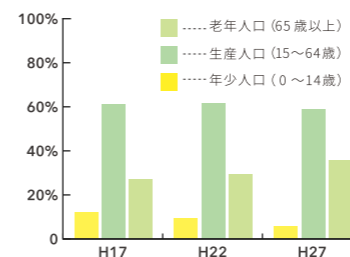
山々に包まれた里山の暮らしと、大自然を求めて人々が訪れる「東海自然歩道」。

茨木市北西端に位置し、安威川の支流・上音羽川沿いに、上ノ谷・中ノ谷・下ノ谷といった集落が点在する。南の山合には「東海自然歩道」が通っており、休日にはハイカーたちが訪れてくる。また、中部の山林地域は「桜の苑」として整備され、市民の憩いの場となっている。史跡としては、400年以上も前に彫られたという「天正二年銘磨崖仏」などがある。

## 集落の基本情報

人口	140人(男:69人、女:71人)
世帯数	47戸
面積	約2.5 km <sup>2</sup>

## 年齢別人口割合の推移



上音羽自治会 会長  
鎌谷 優さん

今ある資源を最大限に活かして、  
上音羽独自の「価値」を生み出していく。

上音羽の地域資源は、なんといっても豊かな自然。高齢化や若年層の流出、農家の担い手不足など、課題は山積されていますが、単なる新しさの追求や開発事業に頼るのではなく、この恵まれた自然環境を守り継ぐことによって課題解決への道筋を見出していくことができないだろうかと模索しています。美しい山々を楽しむことができる東海自然歩道、数多く点在する史跡や社寺、そしてなによりも、脈々と続いてきた人々の営み。これらを見つめ直し、上音羽独自の「価値」へと再構築していく。そして、市内外の人たちに、しっかりと発信していくことが大切だと考えています。山の人と街の人の価値共有を深め、一緒に大自然を堪能したり、景観保全についてアイデアを出し合ったり、子どもたちの環境教育の場になっていくのもいいですね。ただし、このようなビジョンを描き、実践していくためには、集落の力だけでは、なかなか難しい。北部地域全体のネットワークや団結力、行政のサポート、教育機関や識者の方々との連携など、地域を「面」で捉えた仕組みづくりが重要となります。そうした準備を整えていき、一步一步、着実に進んでいく姿勢こそが、真に新しい上音羽へとつながっていくと確信しています。

鎌谷 優 (かまたに まさる)  
1953年、上音羽生まれ。2017年より上音羽自治会会長を務め、現在に至る。

# 下音羽

[しもおとわ]



美しく連なる山々と、清らかな下音羽川が織りなす田園風景。

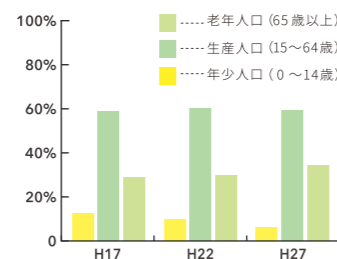
竜王山の北麓に位置し、西から南東に向かって下音羽川が流れる。集落の中心は右岸にあり、その入口高台にある高雲寺には、隠れキリシタンの墓碑が残っている。また、大神家所蔵によるキリスト磔刑像が大阪府の文化財に指定されるなど、千提寺と並び、隠れキリシタンの里として知られている。



## 集落の基本情報

人口	162人(男:77人、女:85人)
世帯数	56戸
面積	約3.4 km <sup>2</sup>

## 年齢別人口割合の推移



見山地区都市農村交流活動推進委員会 委員長

## 大神 弘さん

次の世代へ継承するために、「地域愛」を育むことが大切。

茨木市北部地域では、高齢化や人口流出、農家の担い手不足など、深刻な課題を抱えています。それに伴って、地域間の交流が希薄となり、地元で培われてきた慣習も失われつつあります。そのような時代の流れにおいて「私自身に何ができるのだろう」と模索を続け、辿り着いた答えが、明治から昭和にかけて見山村を支え、村民のために尽力を捧げていただいた、先人たちの「偉業」を見つめ直し、紐解いていくことでした。山間の地に、産業を起し、文化を創り、生活の向上を成し遂げていった行動力の源は、やはり「地域愛」ではなかったでしょうか。地域に活力を取り戻し、課題解決へと導くためには、人々が地域に愛情を注いでいくこと。さらに、愛着と誇りを持って暮らしていける「地域力」を蓄えていくことだと思います。豊かな地域資源をはじめ、歴史や文化、人々の営みを紡いでいながら、北部地域の「価値」を再構築していく。それを地域の方々と共有し、都市部の人たちへ積極的に伝えていくことが大切です。過去から面々と続く古き良き伝統と、新しい発想が結びつくことで、次の世代へ継承するための地域に生まれ変わることができると思っています。

大神 弘(おおがみ ひろし)

下音羽生まれ。下音羽自治会会長などを歴任。2015年より見山地区都市農村交流活動推進委員会委員長を務める。

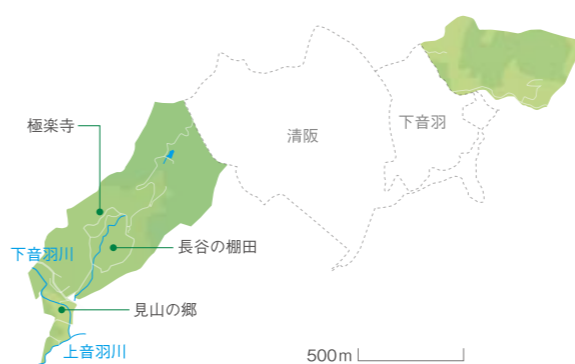
# 長谷

[ながたに]



市街地から多くの人が集まる、地元農家の直売所「見山の郷」。

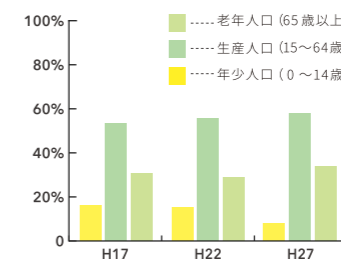
中央部に絶景の棚田があり、それを取り囲むように宅地、畑が点在する。東北部には飛び地の山がある。南部には、地元で採れた米や野菜の直売をはじめ、加工品、料理を提供する施設「de愛・ほっこり 見山の郷」があり、市内外から北部地域へと集客するスポットとなっている。



## 集落の基本情報

人口	50人(男:22人、女:28人)
世帯数	19戸
面積	約0.8 km <sup>2</sup>

## 年齢別人口割合の推移



農事組合法人見山の郷交流施設組合 代表理事

## 原田 忠節さん

茨木の農業を次代に継承し、「新しい見山の郷」を実現させたい。

地元で採れた野菜やお米を直売する施設「de愛・ほっこり見山の郷」が設立されて17年目になります。地理的に旧見山村の中心部にあたるということから、長谷の地が選ばれました。構想の段階から、地元で農業を営む方々にとって、あらゆる面で「拠点」としての役割を担っていると云えます。生産者の流通チャネルであることは勿論、農作物の美味しさを広く普及させていくこと、里山の素晴らしさを市街地の方々に体感していただくこと。さらに、特産品・加工品の開発やイベント開催を通じての話題提供など、さまざまな実践の場でもあります。私は8年前に、代表理事に就任しました。現在の課題は、やはり組合員の担い手不足。北部地域の大半は市街化調整区域なので、若い人が農業をはじめたいと思っても、住居の確保が困難な状況です。行政、地域の人たち、市内外の有識者の方々と一体になって、アイデアや意見を出し合い、現状を打開する仕組みづくりに取り組んでいき、課題解決を目指していかなければなりません。私たちのアクションが、生産者の支えにつながり、茨木の農業を次代に継承していく。そして、若者がリードする「新しい見山の郷」を実現させたいと考えています。

原田 忠節(はらだ ただのり)

下音羽生まれ。民間企業を定年退職し2003年9月見山の郷に店長として勤務。2011年8月より代表理事を務める。自らも農家として、水稲を中心に農業を営む。



# 忍頂寺

[にんちょうじ]



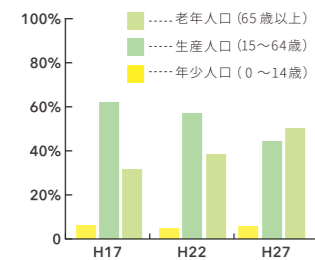
標高510m 茨木の最高峰「竜王山」山頂の展望台から大阪を一望する。

北東に竜王山がそびえ立ち、東海自然歩道を利用した多くのハイカーたちが訪れてくる。宅地は、中央部・竜王山の南向き斜面に点在し、茨木市立忍頂寺小学校がある。北西部一帯には忍頂寺スポーツ公園があり、併設する竜王山荘は、北部地域唯一の宿泊施設として、市内外の人たちにとっての観光・スポーツ・レクリエーションの拠点となっている。

## 集落の基本情報

人口	106人 (男:54人、女:52人)
世帯数	40戸
面積	約1.5 km <sup>2</sup>

## 年齢別人口割合の推移



忍頂寺スポーツ公園・竜王山荘 所長

## 牛島 哲さん

地域の魅力や課題を共有し、  
地元の方々に役立つ「拠点」になりたい。

2017年4月に着任し、忍頂寺スポーツ公園で仕事をすることになって3年目になります。最初は「何からはじめたらいいんだろう」というのが正直なところでしたが、美しい山々に囲まれた自然環境、里山での暮らしを体感していくうちに、地域の魅力はもちろん、さまざまな課題も共有することができ、北部地域における拠点として「やるべきこと」が明確になってきました。市内外から訪れるアスリートやハイカーたちの「集いの場」から、さらに一歩踏み込んで、地元の人々の課題解決に役立つ施設でありたいと考えています。地域の営みについての情報発信やネットワークづくり、高齢化する農家の方々への健康サポートなど、担うべき役割を見出して積極的にトライしていきたいですね。昨年からスタートした「クリーン活動」も、その一環。地震や台風の影響によって荒れてしまった「東海自然歩道」を、市街地のサイクリストや地元の方々と一緒に、継続的に整備や清掃を行っています。活動の輪を通じて、未来の北部地域へのアイデアや具体的なアクションプランが生まれてきています。これからも地域の素晴らしさを、より多くの人たちに伝えていきたいと思っています。

## 牛島 哲(うしじま てる)

長年スポーツクラブで水泳やトレーニングの指導に携わる。趣味でトライアスロンをほそぼそと継続中。

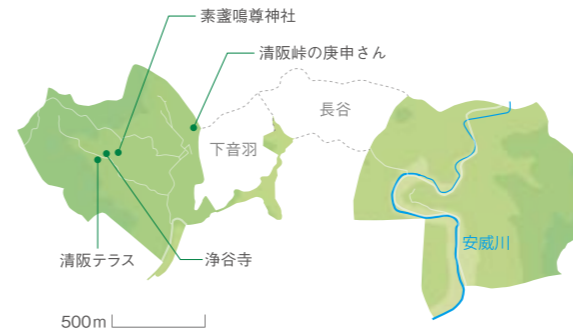
# 清阪

[きよさか]



四方を大自然が取り囲む、急勾配に散在する里山の営み。

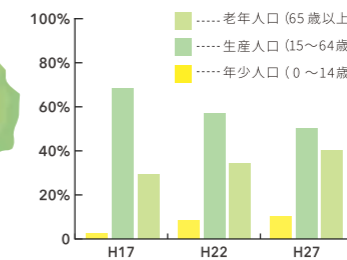
茨木市の北東端に位置し、地区としては西部と飛び地の東部に分けられ、集落の殆どは西部に分布している。その中心には棚田をはじめとする農地が見られる。最近では、新しい農家の在り方を追求する「清阪テラス」ができ、平飼いによる養鶏や市内外の人たちとの農地シェアなどを行い、農業を通して地域の活動人口を高めていく試みが始まっている。



## 集落の基本情報

人口	30人(男:16人、女:14人)
世帯数	10戸
面積	約1.6 km <sup>2</sup>

## 年齢別人口割合の推移



清阪terrace

## 横峯 哲也さん・亜由美さん

自然と共生し循環させることが、  
新しい地域づくりにつながる。

私たちが目指している農業は「自産自消」。自然界の力と人の営みを共生させ、すべてが無駄なく循環できる方法を見出しながら、常々実践を繰り返しています。清阪の地には、山の頂から湧き出る清らかな水と、四方を取り囲む豊かな森林があります。この恵まれた環境に抱かれているだけで、日々を面白くしたり、楽しむためのアイデアが次々と生まれてくる。茨木市北部地域は、高齢化や農家の担い手不足といった深刻な課題を抱えています。地域の方々も行政も、既存の枠組みや制度を飛び越えていかなければならない段階に来ていると思います。若い人たちが地域で暮らしたり、積極的に関わりを持ってもらうためには、農業だけの選択肢ではなく、地域資源を活かした産業や仕事の創出と、それをバックアップする体制づくりが急務ではないでしょうか。特産品のブランディング、環境の整備や保全、自然エネルギー開発など、発想を柔軟にシフトすれば、多様な働き方が可能です。誰かがリスクを負うことなく、みんなで知恵を絞り、役割を理解し合い、地域の課題を地域で解決していく。そのように変わることができれば、誇りを持って次代に継承できる北部地域が実現できると考えています。

## 横峯 哲也(よこみね てつや)

バンドマン、料理人、農業ベンチャーにおける家庭菜園向け野菜作りの指導を経て独立、2013年より清阪terraceとして周辺地域の食品廃棄物を利用した平飼い養鶏を中心に循環型農業に取り組む。



行政と地元の方々との連携、多分野の人たちとの協働を推進させ、みんなと一緒に課題解決へと向かっていきたい。

茨木市北部地域の課題解決に向けた取組みを円滑に推進させ、着実に成果へとつなげていくためには、地元で暮らす方々と行政との親密な連携や、地域づくりに関心の高い多分野の人たちとの協働の体制づくりが重要です。いばきたデザインプロジェクトでは、これらの三者が、しっかりとチームを組み、地域資源や魅力の掘り起こしをはじめ、フィールドワークによるデータベース化、情報の可視化と発信、ネットワーク構築を行っていきます。そのプロセスで得られたノウハウを最大限に活かし、さまざまな人たちが使いこなすことができる「新しい仕組み」をデザインしていくことを目的としています。さらに、プロジェクトの活動が市内外の多くの方々に伝わり「参加することが楽しい!」「関係を持つことが楽しい!」と感じていただけるフィールドづくりを実践し、活動人口の拡大に寄与していきたいと考えています。



茨木市都市整備部 北部整備推進課  
地域づくりグループ

グループ長

濱川 真一 中原 由佳

**濱川**：北部地域の課題解決を進めていく上で、市街地から近い距離に「美しい自然環境」「豊かな里山の暮らし」があるというロケーションを、まだまだ活かされていないと感じています。いばきたデザインプロジェクトの取組みを通じて、あらゆる角度から地域の独自性や優位性を導き出し、継続的に情報発信を行うことで、都会に暮らす多くの人たちに周知を図りたい。さらに、山とまちをつなぐためのムーブメントを創出し、「訪れたい」「関係を持ちたい」「暮らしてみたい」といった機会づくりを積極的に行っていきたいと思っています。

**中原**：地域の課題解決といっても、地元で暮らす方々には、それぞれの立場、想いや考え方があって、正解は一つではありません。私たちの役割は、できるだけ多くの方々と交流を深め、声を聞き、つなぎ合わせていながら、向かうべき道筋を提案していくこと。いばきたデザインプロジェクトは、それを実践するためのフィールドづくりだと捉えています。情報共有や発信、ネットワークを活用していただき、自由に意見やアイデアを出し合える「場」へと育てていく。そして、みなさんと一緒になって、多様性のある地域づくりに取り組んでいきたいと考えています。



濱川 真一（はまかわ しんいち）

茨木市に入庁して、都市計画などの業務に携わった後、北部整備推進課において、北部地域の魅力向上に向けた取組みを進める。

中原 由佳（なかはら ゆか）

平成29年度より北部整備推進課に所属し、北部地域の魅力向上や地域づくりに取り組む。